

【熊本県教育委員会賞】

灯ろうの心を受け継ぐ

山鹿市立大道小学校 6年 濱武 大輝

山鹿灯ろう祭りが今年も中止になってしまった。ぼくは、久しぶりに祭りに出かけて、出店でおいしいものを食べたり、友達にあったりして、にぎやかに過ごすことを楽しみにしていた。とてもがっかりしていたが、灯ろう祭りが行われるはずだった当日、ニュースで山鹿灯ろうの奉納が行われているところが放送されていた。祭りは中止のはずなのにどうしてだろうと不思議に思っていた。しかし、熊本の心の「たった一基の奉納灯ろう」について知り、その理由が分かった気がした。

「たった一基の奉納灯ろう」をつくったのは、山鹿灯ろう師の松本清記さんだ。折り紙が好きで、家のふすま張りも夢中になって、何時間も続けられる子どもだった。叔父がしていた灯ろう制作にもどンドンひかれていった。

叔父の仙太郎は、厳しい人で、自ら手を取って教えるようなことはしなかったのに、清記さんは、制作の技法や約束事を身に付けて「熊本城全景」というすごい作品をつくった。

教えられないのに身につけられるということは、清記さんが自分から学ぼうと思って必死に見たり、聞いたり、自分で練習をしたりしてきたはずだ。これがぼくには足りなかった。ぼくも野球や勉強をできるようにになりたいと思う気持ちはある。しかし、「もっと上手に」とか「もっと勝ちたい」とか自分で思って、自分からできることを見つけて夢中でやっていくような強さとか情熱みたいな心がぼくにも必要だと思った。

戦争のときでさえ奉納された清記さんの灯ろうは、清記さんの心を表していると思う。「灯ろうの伝統を途絶えさせたくない」「灯ろうづくりを受け継いで、つないでいくのは自分しかない」周りがどんなに変わっても、難しい状況でも、自分がやると決めたことをつらぬき通すことは、本当にすごいことだと思う。伝統というのは、こうやって受け継がれてきたのだと改めて思った。

ぼくたちの山鹿市には、灯ろうやうちわなど、古くからの伝統がたくさん受け継がれている。このことは総合の学習で知っていたが、「熊本の心」を読んで、伝統には、その伝統を受け継いできた人たちの「心」があると思うようになった。

「自分から学ぼうとする心」「もっとよくなろうとする心」「自分のきめたことを信じ、つらぬこうとする心」など、こんな心をもってやっていくことは、きっと自分のためだけじゃなくて、人のためにもなると思う。

祭りや灯ろうのように、ぼくたちが楽しんでいるものや日常の生活の中には、清記さんのような「心」が受け継がれてできているものが、もっといっぱいあると思う。そんな風に見てみると、もっと感謝の気持ちをもって生活したいと思うし、自分の中にある「灯ろうの心」を大きくしたいと思うようになった。今日の野球の練習が楽しみになった。